

## [研究ノート]

# ソーシャルワークの文化的背景を探る

～ドイツとルーマニア在住のトルコ系イスラム教徒の事例を踏まえて～

郷 堀 ヨゼフ<sup>※</sup>

Key words：ソーシャルワーク，文化的背景，イスラム教

## はじめに

ソーシャルワークの文化的背景は、筆者にとって中心的な研究課題のひとつである。ここ数年、アジア地域の仏教文化圏における仏教寺院の活動に着目しながら、宗教、この場合は仏教がどのように様々な社会活動に関わっているかについてみてきた。しかし、異国へ移住した場合、異なる文化圏では、宗教との関わり方はどのように変わるのだろうか。本稿では、仏教ではなく、イスラム教を一例として扱い、文化的背景の一要素である宗教について考えていく。ドイツとルーマニア在住のトルコ系のイスラム教徒に焦点を当て、彼ら・彼女らに関連するソーシャルワークの文化的背景を探る。多くのイスラム教徒が居住するバングラデシュやインドネシア等のアジア諸国とは異なる制度や社会の各仕組において、ヨーロッパ在住のイスラム教徒がバングラデシュ等と同様にモスクを中心とした福祉活動を展開しているのだろうか。また、欧州の公的サービスを受ける際に、少数民族の一員として、さらにイスラム教徒として、どのような課題を抱えているのだろうか。このような問いを念頭に置きながら、考察を進めていく。

本稿は、イスラムとソーシャルワークに関する科学研究<sup>1)</sup>の一環として実施してきた取り組みを振り返った研究ノートである。当科学研究では、バングラデシュやインドネシアなどのアジア地域のソーシャルワーク教育と実践に着眼し、イスラム教徒が人口の過半数、または一定数以上を占めており、イスラム教が生活や文化に根付いている地域を主な対象としてきた。その中で、*zakat*<sup>2)</sup>（ザカート）の重要性やイスラム教義に基づく社会活動が確認され、さらにインドネシアなどではイスラム文化や現地の文化・生活を反映したソーシャルワークカリキュラムまでもが提示された。筆者はバングラデシュへ赴いた際に、モスクを中心とする教育、または貧困者や子供、高齢者等を対象とした医療福祉活動について確認した。「イスラム教そのものがソーシャルワークである」というバングラデシュ首都にある代表的なモスクのImam<sup>3)</sup>（イマーム）が残した言

※ 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所上席研究員（准教授）

葉は、多様な活動とその拠り所となるイスラム教の関係性をわかりやすく物語っている。しかし、同じイスラム教徒が、少数民族として異なる地域に在住する場合、モスクの諸機能、そしてイスラム自体の教義等のもつとされるソーシャルワークの役割はどうなるのだろうか。さらに、ソーシャルワークのみならず、医療保険制度や公的教育制度が展開されている国や地域では、バングラデシュなどで確認された宗教者・宗教組織・宗教施設の諸機能も同じく展開されているのだろうか。そこで、ドイツおよびルーマニア在住のトルコ系のイスラム教徒を対象に、上記のリサーチクエストを明らかにするため、本研究を行った。本稿の目的は、この研究活動を通してみえてきた事柄を整理して、ソーシャルワークの文化的ルーツを探る際の課題を提起することである。

## I 研究概要

### 1. 対象

多くのイスラム教徒を移住者として迎えている西洋諸国の中から、ヨーロッパ在住のトルコ人に焦点を絞った。ドイツは、戦後、労働者不足の実態を受けて、二国間契約に基づいてトルコ人男性をGastarbeiter（移住労働者）として受け入れた。その結果、現在、2.5～4百万人のトルコ系の人々がドイツに住んでいる<sup>4)</sup>。いうまでもなく、ソーシャルワークのみならず、ドイツの社会保障制度や医療制度は全市民を網羅し社会的仕組みとして展開されている。

同じヨーロッパとはいえ、トルコ本土により近いバルカン半島は、中世からトルコやイスラムの影響を受けている。そこで、12世紀からトルコ系の人々が在住するというルーマニアを比較対象として選定し、調査を行うことにした。ルーマニアは、旧共産圏としてソーシャルワークを禁ずる時代もあり、1990年代以降も、民主主義や自由経済の原理を取り入れながら社会主義下の社会保障制度・医療制度のあり方を受け継いでいる<sup>5)</sup>。歴史的な背景のみならず、ドイツとは異なる制度や社会的仕組みをみせるルーマニアをあえて対象として設定した<sup>6)</sup>。

### 2. 研究手法

ソーシャルワークの文化的背景を探る際に、利用者の生活様式をはじめ社会と文化に関連する複数のファクターを視野に入れるべきである。本調査は、科学研究全体のデザインを踏まえて文化の一要素である宗教に着眼した。そして、これらにアプローチする際に、本調査では、ステークホルダーへのヒアリングに重点を置いた。ソーシャルワーカー、イスラム教の聖職者数名を対象に、面接法（半構造化インタビュー及びIn-depthインタビューの組み合わせ）を用いてヒアリングを実施した。これらに加えて、資料分析と現地視察を行った。

なお、対象施設及び対象人数を踏まえて考えると、一般化が難しいため、分析・考察の視点として、仮説を設定すること、或いは、今後の研究へと反映できる要素を見出すことを目的とした。

### 3. 実施期間

現地でのヒアリング及び視察は2018年8月6日～20日の間に行ったが、その調整やその後の分析も含めて、研究期間は2018年全期にわたる。

### 4. 倫理的配慮

本調査ではソーシャルワークの利用者（クライアント）等をいっさい対象とせず、ソーシャルワーク職並びに聖職に携わる対象者にのみヒアリングを行った。施設長の許可を得て、対象施設の倫理規定・各指示に基づいて、ヒアリング対象者本人の同意を得た上で実施した。全活動は、筆者の所属する日本社会福祉学会の倫理指針を遵守して実施した。

本研究に関連して、筆者に開示すべき利益相反（COI）はない。

また、対象者への利益及び不利益並びに危険性は生じない。

## II 事例検討

### 1. 事例1：ドイツ西部ケルンの高齢者・障がい者を対象としたソーシャルワーク

#### (1) 対象施設の概要

ドイツ西部のケルン市ミルハイム地区に位置する社会事業事務所の管下に置かれる高齢者・障がい者センター<sup>7)</sup>にて、センター責任者（Einrichtungsleiterin）のRenate Jülicher氏及びトルコ系利用者を担当するソーシャルワーカーのGaye Yilmaz氏にヒアリングを行った。当センターでは、2008年からトルコ系利用者に対して、トルコ人の文化や生活に配慮したサービスを提供している。センターが位置する地域では、トルコからの移住者、またそのような背景をもつ市民が多く、年々、ニーズが高まってきたのを受けて、設立者の市と協議の上、サービスを開始した。Gaye氏自身はトルコ系の人で、トルコ語ができる。利用者の母語であるトルコ語能力がこの任務を担う必須条件であるが、トルコ語のできる人材（ソーシャルワーカー）は限られている。

他施設との相違点として、下記の4点が挙げられる。

- 1) 言語（トルコ語でもコミュニケーションができる）
- 2) 食事（イスラム教徒に適したハラール料理をも提供）
- 3) 入浴（イスラム教の伝統的な方法での入浴も可能）
- 4) 礼拝堂（イスラム教徒専用のお祈りできる空間がある）

また、当センターの利用者の約半数がトルコ系である。イスラム教の祭日や伝統もドイツ（キリスト教系）の祭日及び伝統の両方を一緒に祝ったりして、一緒に料理をつくるプログラム、または合同旅行やその他の活動を行っており、いわゆる多文化共生の形を目指す。

#### (2) ケアのあり方について

当センターでは、原則、個々人に適したケアを提供しているため、イスラム教徒とそうでない

利用者との間に差がほとんどない。しいていえば、男性介護士に直接体に触れてほしくないイスラム教徒の女性の割合が、イスラム教徒ではない女性と比べて高い。男性利用者には差がない。また、AD（アドバンスディレクティブ）では、延命措置を望まないというADをもつ利用者は一定の割合であるが、トルコ系利用者では皆無である。なぜなら、イスラム教では、生命が聖なるものとして位置づけられており、人間の判断でこの生命を絶つ（＝延命措置を行わない）ことが許されないからであると考えられる。

### (3) 宗教生活について

施設内では、超宗教・超宗派の祈りの時間を設けており、参加する利用者が多い。礼拝堂も備えてあるので、祈りの時間にあわせて個人で利用できるようになっている。

しかし、課題は葬儀である。イスラム教徒は聖なる土地で土葬を行わなければならないと定められているため、利用者が死亡した後、トルコ本土へ移送しトルコで葬儀を行うパターンが未だに多くみられる。ただし、このような葬儀のあり方は、かなりの費用を要しており金銭的な負担となっている。葬儀のために、貯金をする利用者も多いが、最近、ケルン市内でもイスラム教徒専用の墓地が設立され始めており、ケルン市内で葬儀を行う利用者（その家族・遺族）が年々増えている。

宗教・信仰は利用者一人ひとりのプライベートな領域に入っているため、イスラム教徒のみならず、ケアラーがすべての利用者の生活様式や文化に配慮する傾向が強く見受けられる。

### (4) 課題

まずは、ケルン市内ではトルコ系の利用者の文化・言語に配慮したサービスを提供する施設として、当センターはただひとつである。その主な原因として、トルコ語ができるソーシャルワーカーが少なく、人手不足であることがあげられる。対応できるスタッフが限られているため、アルツハイマー型認知症の利用者の受入は不可である。

トルコ系の人にとって、老いた親を施設に預けることは恥とされており、この伝統的な価値観が当然ながらケア全体や扶養規範に大きな影響を与えている。利用者が施設へ入所した後、家族はトルコ本土にいる親せきから非難を浴びるケースも珍しくないとスタッフは述べている。

祈りや聖職者による関わり（訪問）は、完全にプライベート領域に入るため、スタッフは、ターミナル時期も含めて極力関与しない。利用者や家族のニーズにあわせて、必要なサポートを提供するという方針を、宗教・信仰に関連する事柄において貫く。

## 2. 事例2：ドイツ西部ドゥイスブルク市の多文化共生施設

### (1) 対象施設の概要

ドゥイスブルク市内に位置しており、ドイツ赤十字社が設立する多文化高齢者施設<sup>8)</sup>に勤務する Zeki Guenes 氏（ケア主任・ソーシャルワーカー）にヒアリングを行った。郊外にあるこの施設は、静かな庭に囲まれており、当市では「多文化共生」のものとして唯一である。ニーズは

高まっているが、ハード面（施設）とソフト面（スタッフ・人材）の両方において追いついていないのが現状である。制度や基本姿勢は一般施設と変わらないが、主に言語と食事という面では、ハード面、ソフト面の両方においてトルコ系利用者に適した形が求められている。

## (2) サービスの方針及び情報へのアクセス

当施設は老人ホーム（介護施設）として運営されており、日本と同様の介護認定（レベル1～5）があり、在宅、デイケア、施設でのケアが提供されている。福祉全般の原理に基づいてすべての市民に対してケアを提供する、したがって、トルコ系の人だろうとドイツ系の人だろうとイスラム教徒だろうと、制度上、法律上、そして提供されるサービスの運営上、民族や個人信仰などはまったく無関係であるというのが、ヒアリングに応えたソーシャルワーカーの認識である。いっぽう、施設でのケアは、個人負担が高く、公的助成金など制度や施設・ケアそのものに関する情報へのアクセスにおいて不平等が生じる。対象となる世代を考えると、トルコ本土で幼少期を過ごした女性が多いが、彼女たちは教育を受けられず、読み書きもできないため、情報へのアクセスが難しい。その結果、入所説明は、ドイツ系の人に対しては15分で済むが、トルコ系の人に対しては1時間以上を要することもある。

## (3) 宗教とその他の要因

当施設は、「多文化共生」を掲げているが、利用者の70%はドイツ系の人で、残りの30%程度がイスラム教徒である。ところが、同じイスラム教徒でも、かなりの差がある。トルコ系の人のほかに、アルバニア出身、シリア出身やイランなどの出身の利用者も入所しており、イスラム教徒といっても一概にはい



写真1 多文化共生老人ホームの外見

えない。したがって、宗教・信仰のみならず、国民性や民族性といった要素も考慮すべきだと考えられ、価値観のほか、生活文化や行動様式にもかなりの違いがみられる。また、同じトルコ系のイスラム教徒でも生活様式や生活文化には個人差があり、利用者一人ひとりに合ったケアを設計すべきという方針が根底にある。設立者は赤十字であり、公的制度を利用しながらケアを提供しているが、利用者一人ひとりの民族・文化・言語・信仰に適しておりこれらを配慮したケアを目指し、すべての利用者を平等に扱うことが原則となる。

信仰・宗教は、利用者のプライベート領域に入っている。多くの宗教者との連携が取れており、定期的に施設に出入りする聖職者もいる。しかし、一部の聖職者は宣教を行っており、施設側として好ましくない要素もあるため、宗教者による関わりとは必ずしもポジティブなものとし

て認識されない。

#### (4) 言語

多くのトルコ系の利用者にとって、ドイツ語とは学習して習得した言語であるため、特にアルツハイマー型認知症を患った場合、母語（トルコ語）しか話せない場面が多くなる。そのため、トルコ語で対応できるスタッフが必要である。言語は、よいケアを提供するためにも、利用者との相互理解を図るためにも欠かせない要素であり、重要な課題である。

#### (5) 信頼

先述した言語の問題よりも、イスラム教徒にとって重要な要因とは信頼関係である。イスラム教徒として、受け入れてもらえるかどうか、または、そのように感じるか否かは、利用者との信頼関係を築く際に極めて重要である。

関係構築は、文化や死生観といった要素にも依拠している。各文化において「やまい」と「疾病」とでは大きな違いがあると医療人類学<sup>9)</sup>等で明らかになっているように、トルコ系の利用者の場合、身体や健康問題に関する文化的制約が明らかに異なる。妊娠を病として認識するトルコ人が多く、また、熱が出たことでも「すぐに死ぬのではないか」とパニック状態を起こすこともあるという。したがって、ケアを提供する側と受ける側との間で、このような認識の差を相互に受け入れて、はじめて信頼性が生まれるといえる。

また、イスラム教徒にとって、いのちとは神からの聖なる贈り物であるがゆえに、このいのちの「お世話」を一生懸命にしなければならないという認識が強い。ドイツ系の人々のもつ価値観及び死生観と明らかに違うところが確認できる。しかし、施設側として、意思決定プロセス（生と死にかかわる問題であっても）においても、利用者の宗教や民族性とは関係なく、すべての利用者に対して同じ基準、同じ仕組みで進められている。とはいえ、このプロセスの中で、一人ひとりの価値観や生活などが尊重されているという方針もまた信頼関係を築くには有効であると考えられる。

さらに、施設内にはイスラム教の礼拝室がある（キリスト教の礼拝室はない）。この礼拝室は、モスクと同じ位置づけになるが、利用者は少ない。ただし、この礼拝室は信頼のシンボルとして意義が大きいと考えられる。メッカの方向を示す印を個室などにつけることもあり、イスラム教徒をそのまま受け入れることを施設側がアピールできている。

#### (6) 日常生活

食事や異性との関わり方等において、トルコ系、あるいはイスラム教徒の相違点についてしばしば指摘されるが、ほとんどはステレオタイプや偏見であると、当施設のスタッフは自らの経験に基づいて述べている。かなりの個人差があり、一概にはいえず、利用者一人ひとりの生活を軸にサービスを提供することが原則となる。

しかし、すべてのイスラム教徒に共通する特徴であり、ドイツ系の利用者とは異なる点は、水である。流れている水のみが清潔とされ、日常生活（調理、洗顔など）に使ってよいとされている。

もうひとつの特徴は、決まった時期に断食することが定められており、これらの決まり事を守



ることが、イスラム教徒にとって重要である。個人差があるとはいえ、たいていのイスラム教徒はこれらを守っている。スタッフにとっての課題は、断食中の投薬である。

さらに、もうひとつの特徴は、靴を脱ぐことである。外を歩く時に履く靴で室内に入るとは、ドイツ系の人にとって何の



写真2 施設内の礼拝室

違和感もないが、イスラム教文化圏では禁止されている行為であるため、施設として、スタッフ一人ひとりとして注意しなければならない点である。

#### (7) ケアを提供する際のその他の注意点

- 1) 服装 特にムスリムの女性は特徴的な服装を着るので、スタッフが知らず経験もない着つけができないことが多い。
- 2) 豚肉 肉だけではなくゼラチン有無など食事制限が厳しい。
- 3) 医療 ほとんどの医師はトルコ語ができないので、通訳を通して診察や治療を行うことが多々あり、医学の知識を有しない家族などが訳す場合が多い。誤解などの危険性が常にある。

### 3. 事例3：ルーマニア東部のイスラム教徒たち

#### (1) ルーマニアにおけるソーシャルワークの歴史的背景

ドイツとは違って、ルーマニアの社会福祉制度やソーシャルワーク実践に関する情報が日本ではやや少ないと考える。そこで、まず、これらについて述べる<sup>10)</sup>。

共産主義時代、ソーシャルワークは禁止されており、西欧と異なる展開を成し遂げた。ヨーロッパにおいて、西洋と東洋の間に位置するルーマニアでは、かつては特にキリスト教の影響を受けながら、キリスト教系慈善事業として多様な活動が展開され、これらを全国規模の制度にまで発展した。20世紀初期において、西欧の影響を受けて、当時のソーシャルワークを導入して実践し、各制度に反映させたが、ルーマニアのソーシャルワークにおける第3ステージと称される共産主義政権下では、ソーシャルワークが廃止された。その後、ポスト共産主義の第4ステージでは、再び西欧型のソーシャルワークが導入され、教育、各制度に反映されるようになった。

トルコ人は、中世から少数民族としてルーマニアに入っており、特に東部地方に多くのトルコ系の人々が代々居住している。しかし、モスクを中心としたソーシャルワーク（福祉）活動について情報がなく、既存研究も存在しない。

トルコ系の人は、数百年にわたってルーマニアで生活しているが、中世からイスラム教とキリスト教の対立や宗教戦争の歴史もあり、宗教というキーワードに対して敏感に反応する人が少ない。いっぽう、首都のブカレストにはユダヤ教のシナゴグがあったり、多くの人が日常的に訪れるキリスト教会もたくさんあり、多宗教・多文化の街という雰囲気が漂う。

## (2) 事例の概要

トルコ系人口が集中するコンスタンツァ市のルーマニア・ムスリム協会<sup>11)</sup>のNurla Ozghim氏にヒアリングを行い、当協会のみならず、市内の福祉施設での情報収集及び資料収集を実施した。

コンスタンツァ市は、ルーマニア東部の港町であり、市内には多くのモスクが点在しており、約4万人のイスラム教徒が住んでいる。トルコ系の市民は、数百年前からこの地域に代々住んでおり、ここ数十年アラブ諸国から新しく移住してきた同じイスラム教徒に対して自分たちが原住民であるという意識を有する。

ムスリム協会は、モスク運営のみならず、イスラム教徒の集うセンターをも運営し、教育活動などを展開している。

## (3) 福祉活動



写真3 コンスタンツァ市内のモスク

ケアや介護は、その90%が家族・親類によって行われ、わずか10%が公的サービスとして提供される。高齢者福祉について、当市では行政・政府が設立し運営する老人ホームなどの施設がひとつもなく、個人負担を伴う民間施設しかない。同時に、モスク付属施設やモスクが直接関与している施設も皆無である。

なお、相互扶助と称すべきイスラム教徒同士の助け合いは、昔から機能しており、その中で特に孤児をサポートする仕組みが現在もお残っている。近年、金銭的に困難な状況に陥る家庭の増加を受け、母子家庭や低所得者の家庭に対して、協会として衣類と食料の提供を行う。

困っている人を助け、低所得者に食料や生活に必要なものを与える習慣が昔からあるため、ソーシャルワークや福祉という認識がなく、自然な感覚として行っているという。イスラム教徒としての連帯感（Solidarity）が背景にあると思われ、宗教をベースとした共同体としてこのような活動を展開している意味合いが強いように思われる。さらに、イスラムの教えは、貧困者をサポートするように促すため、イスラム教との関連の裏付けとなると考えられる。

しかし、イスラム教は、この地域に住むトルコ系の人々全員にとってアイデンティティの一部



ではない。民族や宗教といったカテゴリーを超越した「コンスタンツァの人」という意識が強く、多様な民族と多様な宗教が共存できる土壌ができている。換言すると、宗教アイデンティティ（イスラム教徒）は民族的アイデンティティ（トルコ系）と必ずしも一致していない。さらに、低所得者への支援などの活動については、イスラム教をベースとしたコミュニティ（共同体）が同じイスラム教徒に対して施しているものに限る。

#### (4) Zakat（ザカート）等の資金

イスラムの教えの一部ではあるが、現在、誰も実践しておらず、寄付者も少ないという状況である。そのため、上記の活動（低所得者への支援）は、数少ないスポンサーに依存している。国の補助金などもなく、寄付金のみで運営されているため、その規模も対象も縮小されている。

#### (5) 言語

ルーマニア生まれのトルコ系の人ほとんどであるため、ルーマニア語とトルコ語の両方の言語を操れる。言語に関連する問題は特に認識されていない。公教育は原則ルーマニア語で行われるが、家庭ではトルコ語を使ったり、センターでトルコ語とイスラム教義、そしてアラビア語について学ぶ機会を提供している。

#### (6) 共産主義時代について

同じ共産党圏であったモンゴルやチェコスロバキアとは異なり、ルーマニアでは、モスクを閉鎖し宗教活動を禁止するほど宗教への弾圧は強くなかったが、モスクを定期的に訪れる人が次第に少なくなり、日常生活における宗教的要素が希薄になった。1990年代に入ると、人権や宗教の自由が保障されるようになったが、宗教的活動に携わる人は依然として少ない。チェコやハンガリー、または旧東ドイツと同様の宗教離れといった現象がみられる。

### Ⅲ 考 察

#### 1. 相互扶助であってもソーシャルワークとして認識されない

ドイツ西部のケルン市内には、トルコ本土のような雰囲気が漂う当地域のような地区がいくつかある。「トルコ人街」と称されるところでは、トルコのレストランやカフェがずらりと並んでおり、客で賑わう。また、モスクやイスラム教徒の集うセンター等々もあるが、ソーシャルワークは「国」つまり公的仕組みを土台とする公共施設が担うという位置づけであるため、イスラム教徒を対象としたセンターではもっぱら教育的・文化的活動を行っている。

筆者がバングラデシュで確認したように、モスクやイスラム教徒センターが直接ソーシャルワークなどのようなサービスを提供しているケースがドイツの都市にあるかについて確認を行った。資料収集も含めて関係者、そして、モスク、福祉事務所などへヒアリングの結果、このようなケースは皆無である。ソーシャルワーク、各種サービスは、国の予算、または助成事業で展開されており、社会保険及び介護保険の各制度が適用されるため、宗教法人がこれらの活動を直接

担うことは極めて難しいとされる。キリスト教系組織と同様のチャリティ活動や信者同士の相互扶助についてはむしろ当地域でも確認できるが、福祉サービスやソーシャルワークとは異なるという認識が、ヒアリング対象者全員に共通していることが明らかになった。

公的サービスが充分とはいえないルーマニアのコンスタンツァ市でも、モスクが直接施設を運営したり福祉活動を展開したりする事例を確認できず、各制度、または実践のあり方等々もドイツと異なるが、ドイツに類似した知見が得られた。したがって、バングラデシュなどのアジア諸国のようなイスラム教独自のソーシャルワーク活動といえる現象については確認できなかった。

## 2. 利用者の文化的要素としてのイスラム教

文化的要素として、イスラム教徒に対して提供されるサービスの中で食事及び言語が主なファクターとして確認された。その他、様々な相違点について示唆されたが、特にドイツの場合、ソーシャルワークは宗教や民族を超越したものとして認識されているといえる。利用者個人の生活様式や宗教、または価値観などに合わせてその対応や方法を調節できると考えられる (Gohori, 2019, pp. 111-114)。

公的サービスとして提供されるソーシャルワークについて、民族や宗教を超越した形が確認され、多民族・他宗教の共生・共存が前提となる。ドイツでは、近年、トルコ系利用者に対するサービスが顕著になっており、その背景には、異なる宗教・異なる民族（言語・生活習慣）があるが、仏教ソーシャルワークのような (Gohori, 2017)、仏教ならではの独自の取り組みや西欧で一般的に実践されてきたソーシャルワークとは異なるアプローチなどは見られなかった。

ソーシャルワークは、確かにキリスト教をベースとした歴史をもつが、熱心なキリスト教徒が施設内でお祈りや日常的な決まり事などを守ろうとすると、イスラム教徒と同じくらいの課題が生じることだろう。デンマークでは、近年、福祉分野において、民族や宗教を超えた政治的民族（独：Politisches Nation）を基盤に様々な実践を行っている<sup>12)</sup>。お互いの生活や文化の違いを隠すことなく、あえて、相手にみせて明確にすることによって、お互いの違いを認識し、双方の理解と尊重が生まれると同時に信頼関係が築かれるといった効果が期待されている。この実践とは政教分離の影響を受けた考え方ともいえるが、対象国のドイツとルーマニアの両方においても、公的制度とプライベートな領域である宗教・信仰との隔たりを確認できる。これは、宗教や信仰が、個人のみならずコミュニティ全体の生活基盤・価値基盤を成すバングラデシュなどのアジアの地域と決定的な違いであるといえる。

## おわりに

すでに述べているが、限られた事例と対象者数では、一般化が難しく、宗教（本稿の場合、イスラム教）とソーシャルワークとの関連性を実証するには、データが少ない。数百年にわたって

ルーマニアで生活しているトルコ系のイスラム教徒がマジョリティを占める村落地域での調査、さらに、トルコ本土の宗教コミュニティ及びモスクの役割について、今後、データを収集し確認する必要がある。

しかし、イスラム教や仏教などの特定の宗教の教義等というより、個人の生活と人生、そして社会の生活と社会の各仕組における宗教の位置づけが、ソーシャルワークの文化的背景を探る際に有効なファクターとして本調査で確認できたと考える。近年、ヨーロッパにおけるイスラム教の個人化のプロセスが注目され、アイデンティティ形成への影響が論じられることもこれらを裏付ける (Jeldtoft, 2011; Schmidt, 2007)。いっぽうのアジアの多く地域では、考察で述べた通り、仏教にしてもイスラム教にしても、宗教がコミュニティ全体、または社会全体の基盤を成している。さらに、宗教を生活全般と各仕組と容易に分離できない関係にあるといえる。

特にドイツでは、利用者本人の文化と生活（人生）を軸とした実践が確認され、利用者のこうした背景が異なっても、誰に対してでも適用できる手法や介入法としてソーシャルワークが認識されている。これは、特定の文化に依拠しない絶対主義（ユニバーサルアプローチ）と相対主義との論争を連想させるが (Ives, 2015)、ソーシャルワークの文化的背景を探る際にもうひとつの重要要因として本研究で確認された。

## 謝 辞

本研究は独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（挑戦的研究（萌芽））2017－2019年度の助成を受け実施されたものである。

現地調整及び通訳を担ったLucie Mantel氏をはじめ、本調査に協力してくれたすべての方々に心より感謝申し上げます。

## 【注釈】

- 1) 科学研究『JSPS KAKENHI Grant Fund No. JP17K18586: Social Work and Religion in Asia —The Case of Muslim— For the Evolution of Social Work』代表：松尾加奈。
- 2) 貧困者のため義務的な寄附。
- 3) イスラム教の指導者、または司式僧、導師。
- 4) 人数は推定となる。なぜなら、国籍と民族（エスニック）の区別の問題が生じており、ドイツ国籍でもトルコ民族の市民が一定数以上いる。同時に、民族は個人情報として国勢調査などで問うことができず、正確な統計が存在しない。さらに、本調査では、トルコ系クルド人とトルコ人を区別せず、基本的な対象を「トルコ系・イスラム教徒」と定める。
- 5) Lazar, F. (2015) Social work and welfare policy in Romania: history and current challenges. In *European Journal of Social Work* (Eur J Soc Work). 14-15.
- 6) さらに、トルコ本土のソーシャルワーク教育と実践のあり方、コミュニティのあり方、そしてモスクを中心とした活動をも比較対象にし、トルコでも現地調査を企画したが、クーデター未遂等を受けてトルコ大統領令で国内のソーシャルワーク事務所が反社会的運動を行うものとして閉鎖されたことを受け

て、調査当時まだ不安定な時期であった。そこで、現地の研究協力者と相談の上、現地のソーシャルワーカーや協力者に危険や悪影響を与えかねないとし、トルコ本土での活動を全面的に中止した。

- 7) SBK Sozial-Betriebe-Köln gemeinnützige GmbH, Städt. Senioren- und Behindertenzentrum Köln-Mülheim, Tiefentalstraße 68-70, 51063 Köln.
- 8) Deutsches Rotes Kreuz Nordrhein GmbH.  
施設名：Multikulturelles Seniorenzentrum „Haus am Sandberg“ Kirchstraße 28g | 47198 Duisburg.
- 9) Kleinman, A. (1978) Concepts and a model for the comparison of medical systems as cultural systems. In *Social Science & Medicine. Part B: Medical Anthropology. Volume 12*, 85-93.
- 10) 当項はFlorin Lazar教授（ブカレスト大学）へのヒアリングに基づいたものである。
- 11) Asociatia Musulmanir din Romania.
- 12) ケルン市カリタス社高齢者福祉コーディネーターへのヒアリングに基づく。Edeltraud Stecher氏、Caritasverband für die Stadt Köln e.V., Caritas-Zentrum Chorweiler Senioren Netzwerk Heimersdorf, Koordination Volkhovener Weg 174, 50767 Köln.

### 【引用文献・参考文献】

- Crabtree, S. A., Husain, F. Spalek, B. (2008) *Islam and Social Work: Debating Values, Transforming Practice*. Policy Press.
- 郷堀ヨゼフ（編）（2017）『西洋生まれソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ』学文社.
- Gohori, J. (2019) On religion and social work. In Tran Nhan Tong Institute (eds) *Social assistance activities of contemporary Buddhism*. 107-114. Hanoi, Vietnam: Vietnam National University Press.
- Ives, N., Denov, M. Sussman, T. (2015) *Introduction to social work in Canada*. Don Mills, ON: Oxford University Press.
- Jeldtoft, N. (2011) Lived Islam: religious identity with 'non-organized' Muslim minorities. In: *Ethnic and Racial Studies*. Volume 34, Issue 7: Methods in the study of non-organised Muslim minorities.
- Lazar, F. (2015) Social work and welfare policy in Romania: history and current challenges. In *European Journal of Social Work* (Eur J Soc Work). 14-15.
- Lazar, F. (2020) Rebuilding Romanian Social Work Education after 1989: Benefits and Constraints from European Collaboration. In Lorenz, Havrdova, Matousek (eds.) *European Social Work After 1989* (83-99) Cham: Springer.
- Matsuo, K. (2020) *Social Work and Religion in Asia —The Case of Muslim— For the Evolution of Social Work*. Asia Research Institute for International Social Work, Shukutoku University. JSPS Kaken Report.
- Schmidt, G. (2004) Islamic identity formation among young Muslims: the case of Denmark, Sweden and the United States. In: *Journal of Muslim Minority Affairs*. Volume 24, Issue 1.
- 淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター（編）（2016）『社会福祉宗教とソーシャルワーク ～仏教の場合～イスラム教の場合～』研究報告書【日本社会事業大学主催「第24回環太平洋社会福祉セミナー アジア型ソーシャルワークを構築する」2015年12月12-13日（淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター共催）会議録】。